「赤羽さんは飲み会に来ない」

坪井　努

【あらすじ】

赤羽かなた（25）はバイト先のカフェ店で浮いた存在である。誰とも親しくせず、バイト先の飲み会には一度も参加した事がない。

ある日、赤羽は同僚バイトの志田澄玲（25）にしつこく飲み会に誘われる。澄玲はバイトの先輩、新山理恵（24）に赤羽を飲み会に誘うよう圧力をかけられていた。理恵は赤羽を飲み会に呼びイジって弄ぼうとしていたのだ。

自転車で帰宅する赤羽を、走って追いかけ飲み会に誘っていた澄玲は転んで怪我をする。赤羽は仕方なく自宅で澄玲の傷の手当をする。澄玲は、赤羽の意外な優しさや、趣味が珈琲豆の自家焙煎だと知り、赤羽に興味を抱く。

赤羽と澄玲は次第に打ち解けて、一緒に帰るようになる。澄玲は理恵の圧力をはねのけ、赤羽を飲み会に誘う事はしなくなった。

ある時、赤羽は澄玲が「濁斗」という名でアート活動をしている事を知る。その事を澄玲は赤羽やバイト先の人達に秘密にしていた。

赤羽はこっそり濁斗が参加する個展に行く。濁斗の展示作品は、赤羽やバイトの同僚達をモデルにした人物達を見下したように描いた絵だった。ショックを受けた赤羽は、会場で澄玲と出くわすも、その場から逃げ去る。

後日、赤羽は澄玲としっかりと向き合い、話し合う。澄玲は頭に浮かぶイメージをそのまま絵に描いただけで、絵に悪意はないと弁明した。赤羽は澄玲を信じて、受け入れた。

後日、澄玲はアートのコンクールで入賞し、その事を赤羽だけに嬉しそうに報告する。

そんな中、バイト先に来た澄玲の母親に、濁斗の活動を皆にバラされ、バイトの同僚達をモデルにした絵の事も皆に知られてしまい、澄玲はバイト先で居場所を失ってしまう。

赤羽は澄玲を励ますため家に招き、自作の珈琲をご馳走して、二人で「飲み会」をする。

澄玲は父親の介護のため実家に帰る事になった。赤羽は澄玲と離れ離れになる事で初めて、「人と関わる事の尊さ」に気付くのだった。

【人物関係表】

赤羽かなた（25）主人公　カフェ店のバイト

志田澄玲　（25）赤羽の同僚バイト／アーティスト／イラストレーター

新山理恵（24）カフェ店バイト　古株

小杉クミ（20）カフェ店バイト　大学生

進藤　博（32）カフェ店バイト　リーダー

久保隆史（23）カフェ店バイト　フリーター

店長　（男・43）カフェ店店長

志田裕子（50）澄玲の母親

１○　カフェ店「オールウェイズ」・外観

都内にあるチェーン店。

「ガシャン」という音。

２○　同・店内

床に、割れたコーヒーカップの破片が散らばっている。

カップを落とした女性客、カウンターの方へ、

女性客「すみません、落としちゃいました」

カウンターに立つ、バイトの新山理恵（24）と小杉クミ（20）。

クミ「私、行ってきます」

クミ、ホールに出ようとする。

理恵、クミの袖を掴み、

理恵「ちょっと待って」

キッチンから赤羽（あかばね）かなた（25）が箒と塵取りを持って出てくる。

クミ「赤羽さん、準備はやっ」

赤羽、女性客のもとへ行き、

赤羽「（完璧な接客スマイルで）お怪我はございませんか」

女性客「大丈夫です、ごめんなさいね」

赤羽「（変わらず笑顔で）いいえ、すぐに片付けますので」

理恵とクミ、ニヤニヤ笑いながら赤羽を見ている。

理恵「（赤羽のマネ）すぐに片付けますので」

クミ「ははは、理恵さん似すぎ」

赤羽、素早く丁寧に割れたカップを片付けていく。

理恵とクミのクスクス笑う声が聞こえてくる。

赤羽「……」

３〇　同・外（夕）

店の駐輪スペース。

バイトを終えた赤羽、自分の自転車の前でヘルメットをかぶる。

従業員口から、バイトの志田澄玲（２５）

が出てきて、

澄玲「赤羽さん、今ちょっといいですか？」

赤羽「すみません、この後用事があるので」

赤羽、素早く鍵を開け、自転車に跨る。

澄玲「飲み会！」

赤羽「えっ……」

澄玲「次の木曜、バイトの飲み会があるんですけど、赤羽さん参加しませんか？」

赤羽「すみません、木曜日は用事あるので」

澄玲「そうですか、ちなみに何曜日なら大丈夫とかありますか？」

赤羽「全曜日大丈夫じゃないです」

澄玲「……」

赤羽「（笑顔を作り）それではお疲れ様です」

赤羽、颯爽と自転車で去って行く。

立ち尽くす澄玲。

どんどん小さくなっていく赤羽の背中。

４○　タイトル「赤羽さんは飲み会に来ない」

５○　赤羽のアパート・外観（夜）

川沿いにある、二階建てのアパート。

６○　同・キッチン

赤羽、カセットコンロで蓋つきの鍋を前後に振り、珈琲豆を焙煎している。

鍋の中の生豆が黒くなっていく。

突然、赤羽の耳に理恵とクミの笑い声が聞こえてくる。

赤羽の作業する手がとまる。

赤羽「……」

理恵の声「（赤羽のマネ）すぐに片付けますので」

クミの声「ははは、理恵さん似すぎ」

大音量の理恵とクミの笑い声。

赤羽の顔が歪む。

鍋の中からパチパチと音が鳴りだす。

珈琲豆がハゼる音だ。

赤羽、鍋に耳を澄ませる。

赤羽「……（心地いい）」

7○　「オールウェイズ」・店内（翌朝）

モーニングの時間で店内はお客が多い。

忙しく働く店員達。

カウンターで注文を受ける、バイトの久保隆史（23）とクミ。

カウンター奥の珈琲マシンの前に立つ、ドリンク担当の赤羽。

クミ「店内で、カフェラテホットMサイズ」

赤羽「はい」

赤羽、カフェラテのミルクを上手に泡立たせていく。

バイトリーダーの進藤博（32）、赤羽からカフェラテを受け取って、

進藤「赤羽くんのスチーミング最高だね」

赤羽「いいえ、全然そんなこと」

進藤「自信持って、君がこの店のエースだ」

赤羽「いや、いいですそういうの……」

8○　同・キッチン

澄玲、排水溝に詰まったヘドロを取り除いている。

理恵が鼻をつまみながらやって来て、

理恵「くさっ」

澄玲「すぐ終わらせますので」

理恵「悪いね志田さん、いつもそれやってもらって」

澄玲「いいんですいいんです」

理恵「そういえば赤羽くん飲み会来てくれるって？」

澄玲「赤羽さん用事あって来れないって言ってました」

理恵「えーそうなの、赤羽くんて一回も飲み会来たことないよね」

澄玲「ですよね、お酒飲めないんですかね」

理恵「お酒飲めなくても、付き合いで飲み会くらい参加するのが普通でしょ」

澄玲「まあ、そうですよね」

理恵「赤羽くんてさプライベート謎じゃん、赤羽くんの事もっと知りたいじゃん」

澄玲「……あ、はい、私もそう思います」
理恵「だからさ、志田さん、もうちょいねば
ってみてよ」
澄玲「分かりました、今日また誘ってみます」
理恵、澄玲の背中をポンポンたたき、
理恵「絶対参加させてよ」
澄玲「（笑顔で）私に任せてください」

9〇　同・店内
お昼前の落ち着いた時間。
カウンターに立つ赤羽と澄玲。
澄玲「赤羽さん飲み会……」
赤羽「（即答）行きません」
澄玲「……みんな赤羽さんと仲良くなりたい
って言ってて」
赤羽「お店の中では、仕事に支障ない程度の
コミュニケーションは問題なく取ってるつ
もりなので」
澄玲「たしかにそうですけど……」
お客がやって来て、

赤羽「（完璧なスマイル）いらっしゃいませ」

澄玲「……」

10○　赤羽のアパート・リビング（夜）

赤羽、大きなトレーに入った大量の珈琲の生豆（薄緑色）の中から、選んで取り出したものを、別の小さなトレーに分けていく（ハンドピック作業）。

小さなトレーには、色や形が変な豆や虫食い豆が入れられている。

赤羽、無心で作業に没頭している。

11○　川沿いの道（翌朝）

早朝。

ジョギングしている澄玲。

ふと、アパート（赤羽の家）にとめてある自転車を見て、立ち止まる。

澄玲「……赤羽さんの」

アパートの二階のカーテンが開く。

マグカップを持った赤羽の姿が見える。

澄玲「あ、赤羽さん」

澄玲、赤羽に手を振る。

赤羽、澄玲に気付くと同時にカーテンを閉める。

澄玲「えっ……」

12○　「オールウェイズ」・バックヤード

赤羽が出勤してくる。

先に出勤していた澄玲が赤羽に、

澄玲「赤羽さんの家あそこだったんですね、私の家から結構近いですよ」

赤羽「そういうのやめてもらっていいですか」

澄玲「え、そういうのってどういうのですか」

赤羽「その距離感……」

澄玲「えっ」

赤羽「……もういいです」

13○　同・外（夕）

バイトを終えた赤羽、従業員口から出てきて、駐輪スペースに向かう。

赤羽の自転車の前に澄玲が立っている。

赤羽「（怖い）」

澄玲「お疲れ様です」

赤羽「……」

赤羽、澄玲の横を無言で通り過ぎ、素早く自転車に乗って走り出す。

14○　川沿いの道（夕）

自転車で走る赤羽。

「はぁはぁ」という呼吸音が聞こえる。

横を向くとショルダーバッグをかけた澄玲が走って並走していた。

赤羽「……あの、ついてこないでください」

澄玲「べつにつけてないですよ、私の家こっちの方角なので」

赤羽「……」

赤羽、スピードを上げる。

澄玲もスピードを上げ、赤羽の横にピッタリと並走していく。

赤羽「……やめてもらえませんか」

澄玲「なにをですか」
赤羽「スピード合わせてきてますよね」
澄玲「合わせてません、赤羽さんが合わせてきてるんじゃないですか」
赤羽「はいっ」
澄玲「私は、自分の思うままに走ってるだけです」
赤羽「……」

赤羽、急ブレーキをかける。
澄玲、止まろうとして、派手に転ぶ。

澄玲「いたっ……」
赤羽「……大丈夫ですか」

身体を起こす澄玲。

澄玲「……危ないじゃないですか、なんで急に止まるんですか」
赤羽「いや、急には止まってません、僕は自分の中で数秒前から止まろうと思って止まったので、全然急にじゃないです」
澄玲「それだったらすみません、赤羽さんの心の声を考慮せず、一方的な物言いになっ

てしまって」
赤羽「ていうか僕が止まったから止まるって事は、やっぱり僕をつけてるって事じゃないですか」
澄玲「……そんな事は」
赤羽「……志田さん、新山さんに言われて僕を飲み会に誘ってるんですよね」
澄玲「（動揺して）えっ、なんでその事」
赤羽「やっぱり」
澄玲「（しまった、と）あ……」
赤羽「……志田さん、僕達があの人達にバカにされてるの気付いてます？」
澄玲「バカにされてる……、え、誰に……」
赤羽「……それだからバカにされるんですよ」
澄玲「べつにバカにされてなんかいません、みんな赤羽さんの事知りたいって言ってて、同い年の私に赤羽さんを飲み会に誘ってほしいってなって」
赤羽「もうこれ以上お店の外で話しかけるのはやめてください」

澄玲「私はただ……」

赤羽「それでは」

赤羽、自転車で走りだす。

とは言いつつ気になって、自転車をとめて、振り向く。

澄玲、ズボンをまくって、膝の擦りむき傷を見ている。

赤羽「……」

15○　赤羽のアパート・廊下（夕）

二階の赤羽の部屋の前で、赤羽が澄玲の足の傷を消毒している。

澄玲「……なんか、ありがとうございます」

デリバリー配達員が階段を上がってきて、赤羽達の前で立ち止まる。

赤羽「（配達員に）あ、すみません」

澄玲「私達すごい邪魔ですね」

赤羽「……一旦、僕の部屋に入ってください」

赤羽、ドアを開ける。

澄玲「わかりました」

赤羽「一旦ですよ」
澄玲「お邪魔します」
澄玲、中に入っていく。

16○　同・リビング
赤羽、澄玲の傷の消毒を続けている。
赤羽「消毒終わったらすぐ帰ってください」
澄玲「はい」
澄玲、赤羽の部屋を見回す。
赤羽「部屋見回さないでください」
キッチンに置かれた、焙煎用の鍋や、珈琲ミル、ドリッパーなどを見て、
澄玲「赤羽さん、自分で珈琲作ってるんですか」
赤羽「はい、趣味なんで、焙煎もしてます」
澄玲「本格的ですね、赤羽さんの解像度上がりました」
赤羽、絆創膏を澄玲の膝に貼り、
赤羽「はい終わりました」
澄玲「（テーブルを見て）あっ、あれって」

澄玲、立ち上がり、テーブルの上に置かれたプラスチックケースを手に取る。

赤羽「ちょっと」

澄玲、ケースのフタを開けると、中には珈琲の生豆が入っている。

赤羽「勝手に開けないでください」

澄玲「これが焙煎する前の珈琲豆ですか？」

赤羽、澄玲からケースを奪い取り、

赤羽「そうですけど、これは欠点豆です」

澄玲「欠点豆？」

赤羽「焙煎に使わない豆です」

澄玲「なんで使わないんですか」

赤羽、欠点豆を一つ取り出し、

赤羽「例えばこれは貝殻豆です」

澄玲「かいがら？」

赤羽「貝殻みたいに中が空洞になってるんです、これを焙煎すると、火が入りやすくて煎りムラが出来てしまうので、取り除いてるんです」

澄玲「へぇー」

赤羽、他の欠点豆を取り出していき、
赤羽「ほかに虫食い豆とか、未成熟豆とか、珈琲の風味を悪くする豆は取り除いてるんです」
澄玲「そんなに不味くなるんですか」
赤羽「はい、この豆使ったら味に渋みが出過ぎて、すごく苦くなってしまいます」
澄玲「これって、全部捨てちゃうんですか？」
赤羽「……はい、まあ」
澄玲「もったいないですね」
赤羽「仕方ありません、美味しい珈琲を飲むためです」
澄玲「……私に、この欠点豆を使った珈琲作ってくれませんか」
赤羽「はい？」
澄玲「だって本当にもったいないじゃないですか、捨てるんなら不味くてもいいから、私飲みたいなと思って」
赤羽「美味しくない珈琲は作りたくありません」

澄玲「そうですか……」
赤羽「それより早く帰ってくれませんか、もうとっくに傷の手当終わってるので」
澄玲「……あ、はい、本当に迷惑かけてすみませんでした」
赤羽「あと、バイト先の人達には志田さんが僕の家に来た事言わないでくれませんか」
澄玲「……え、どうしてですか」
赤羽「みんなに僕達のこと、変に噂されてもお互いやりづらいと思うので」
澄玲「なるほど、分かりました」
澄玲、部屋を出ようとして立ち止まり、
澄玲「……赤羽さん、飲み会に参加してくれませんか」
赤羽「（即答）嫌です」
澄玲「そんなに嫌なんですか」
赤羽「はい」
澄玲「どうして嫌なんですか」
赤羽「……」
赤羽、何も答えない。

澄玲「……分かりました、お邪魔しました」
澄玲、家を出ていく。
赤羽「……」

17○　「オールウェイズ」・店内（翌日）
赤羽、カウンターでレジの点検をスピィーディーに行っている。
澄玲が来て、
澄玲「赤羽さん、昨日は自家焙煎しましたか」
赤羽、作業をしながら、
赤羽「プライベートに関する話はしたくないです」
澄玲「えっ……」
レジの点検が終わる。
赤羽「はい終了、プラマイゼロ」
澄玲「……」
カウンターに客がやってくる。
赤羽、素早くレジを開け、
赤羽「（完璧な笑顔で）いらっしゃいませ」

18○　同・休憩室

テーブルで向き合い座る澄玲とクミ。

クミ、スマホをいじりながら、

クミ「理恵さんが赤羽さんの件どうなったって聞いてきてます」

澄玲「やっぱり赤羽さん飲み会行けないそうです、かなり意思は固そうです」

クミ「（スマホに打ち込み）赤羽さんの意志は固いと……、（返信が来て）どこで意思固くしてんだって言ってきてます」

澄玲「……理恵さんが直接誘ってみたらどうでしょうか」

クミ「（スマホに打ち込み）お前が誘えと……」

澄玲「そんなことは……」

クミ「（返信がきて）私が誘うとパワハラになるからって言ってます、理恵さん赤羽さんより年下ですけど勤続年数長いですからね、……正直だるいっすよね」

澄玲「えっ」

クミ「理恵さん」

澄玲「……」

クミ「赤羽さん飲み会に参加させて、イジり倒したいだけですよ絶対」

澄玲「……」

クミ「(返信がきて)それならもういいよって言ってきてます」

澄玲「……」

クミ「(返信がきて)いろいろありがとねって」

澄玲「……あの」

クミ「はい」

澄玲「……私、もう一度誘ってみます」

クミ「(スマホに打ち込む)もっかいチャレンジするそうですよと、(すぐに返信がきて)「よろ」って言ってます」

澄玲「……はい」

クミ「それなら赤羽さんを飲み会に来させなかったら、志田さん焼肉奢ってくださいよ」

澄玲「えっ……」

クミ「あ、今のは私の言葉です」

澄玲「あ、ああ……」

クミ「冗談ですよ」
澄玲「はい……」
クミ「（スマホを打ち）赤羽さんが飲み会来なかったら、志田さん焼肉奢るそうですと」
澄玲「……」
クミ「冗談ですからね、（返信が来て）焼肉のスタンプ来てます」
澄玲「……」

19○　同・外（夕）
赤羽、駐輪スペースから自転車を出している。
周りを見回すが誰もいない。
赤羽「（安心）」

20○　川沿いの道（夕）
自転車で走っている赤羽。
気付いたら澄玲が、赤羽の横を並走していた。
赤羽「……あの、またですか」

澄玲は何も答えず、赤羽の横を走り続ける。

赤羽「……」

澄玲、スピードを上げて、赤羽の少し前を走る。

赤羽「（怒り）」

赤羽、スピードを上げ、澄玲を追い越し、大きく距離を開ける。

赤羽「（満足げな表情）」

気付くと、すでに澄玲がすぐ横を並走している。

赤羽「（驚き）……ちょっと、さっきからなんなんですか」

黙ったままの澄玲。

赤羽「無視ですか？」

澄玲、急に走るのをやめる。

赤羽、思わずブレーキをかける。

赤羽「（澄玲に振り返り）ちょっと、急にどうしたんですか」

澄玲「（ここではじめて赤羽を見て）あれっ、

赤羽さん、どうして今止まったんですか？」
赤羽「だって志田さんがいきなり走るのやめたから……」
澄玲「私がどこで走るのをやめようが私の勝手じゃないですか」
赤羽「……たしかにそうですけど」
澄玲「なんで私が止まると、赤羽さんも一緒に止まるんですか」
赤羽「……昨日も同じ論争しませんでした」
澄玲「私、全く分からないです赤羽さんの事……、昨日は急に家に上げてくれたり、その次の日はいつも以上に距離感がある対応してきたり」
赤羽「昨日はただ傷の手当をしただけで」
澄玲「赤羽さんは私と距離を縮めたいんですか？　それとも距離をとりたいんですか？」
赤羽「……どっちでもないです」
澄玲「えっ」
赤羽「ずっと同じ距離感で……」
澄玲「同じ距離感？」

赤羽「（大声で）何も変わらなくていいんです」
澄玲「（驚き）……」
赤羽「僕、べつに、人と人が距離を近づける
のが良い事だって思ってないんです、ある
程度の距離感を維持したままでいい、それ
が一番生きていくのに心地がいいから」
澄玲「……そうですか」
赤羽「（我に返り）すみません……、こんな街
中で、僕の主張を聞かせてしまって」
澄玲「いいえ、赤羽さんの思想が聞けて光栄
です」
赤羽「……なのでこれまで通りの距離感のま
まで、引き続きよろしくお願いいたします」
澄玲「こちらこそ、……いたします」
赤羽「（頭を下げ）それではお疲れ様です」
赤羽、自転車で走り出す。
赤羽の横を澄玲が並走する。
赤羽「……だからなんで」
澄玲「話しかけないでもらえますか、距離が
縮まってしまうので、赤羽さんの思想に反

しますよ」
赤羽「……」
何も話さず、並走する二人。
澄玲、ショルダーバッグを赤羽の自転車のカゴに入れる。
赤羽「ちょっと何するんですか」
澄玲「あ、すみません、ちょうどいいところにカゴがあったので」
赤羽「……」
澄玲「……もう飲み会には誘いませんよ」
赤羽「……」
澄玲「……私たちは帰り道が一緒なだけです」
赤羽「……」
澄玲「バイトの帰り道、バイトの同僚とばったり会ってしまった、その時に挨拶程度の会話をする、それはいたって普通の事です」
赤羽「……」
澄玲「挨拶程度の会話をしない方が不自然です」
赤羽「でも「ばったり会った」は嘘ですよね」

澄玲「「帰り道たまたま会ったバイトの同僚」、
それ以上でもそれ以下でもありません」
赤羽「……」
二人、小さな橋の前につく。
澄玲が止まり、足踏みをしながら、
澄玲「それではここで、私の家は、この橋渡
らないで、こっち曲がったところなので」
赤羽「……はい、お疲れ様です」
澄玲「お疲れ様です」
澄玲、走って行く。
赤羽、カゴの中のバッグに気付き、
赤羽「あ、ちょっと、バッグ」
澄玲「（気付き）あ、そうだ」
澄玲、戻って、カゴからバッグを取り、
走り去って行く。
赤羽、カゴの中に名刺が入っているの
に気づき、手に取る。
「アーティスト　濁斗」とある。
赤羽「……だく？」

21○　赤羽のアパート・リビング（夜）

赤羽、マグカップで珈琲を飲みながら、スマホを見ている。

検索エンジンに「濁斗」と打ち、検索する。検索結果の欄に濁斗（だくと）のインスタを発見し、開く。

アカウントの顔写真は、手で顔を隠しているが、髪型や顔の輪郭から、澄玲のようにも見える。

赤羽「……やっぱり志田さん？」

プロフィール欄に「玉野美大卒／アーティスト／イラストレーター」とある。

絵やイラストが多数アップされている。人の顔や街の風景など、奇抜で個性的なタッチで描かれた絵。

赤羽「（意外だなと）……へえ」

最新のメッセージに、「今月画材買い過ぎてお金がない」とある。

赤羽「……」

22○　「オールウェイズ」・店内（日替わり）

カウンターに立つ赤羽。

赤羽の隣で澄玲が新商品のＰＯＰを作っている。

独特のタッチで描かれたコーヒーカップのイラスト。

赤羽「澄玲さん、絵上手いですね……」

澄玲「（遮って）それ仕事の話ですか？」

赤羽「えっ……」

澄玲「店では仕事の話以外しないでください、赤羽さんの思想に反しますから」

赤羽「……（ＰＯＰを指さし）一応、仕事の話ですけど」

澄玲、答える事なく、イラストを描き続ける。

赤羽「……」

23○　同・休憩室の外

赤羽、休憩室に入ろうとする。

理恵達の声が聞こえてくる。

赤羽、ドアの前で立ち止まる。
理恵の声「赤羽くんと志田さんてやっぱちょっと似てない？」
クミの声「私もそう思います、二人共やばいくらい天然ですよね」
大笑いする理恵達。
赤羽「……」
理恵の声「あー飲み会で赤羽いじり倒してー」
クミの声「本当に来るんですかね」
理恵の声「絶対来させる」
クミの声「でも赤羽さんが飲み会来ちゃったら、志田さんに焼肉奢ってもらえなくなっちゃいますよ」
赤羽「……」
理恵の声「その焼肉奢る罰ゲームみたいなの、もう決定なの」
クミの声「志田さんなら本当に奢ってくれそうじゃないですか」
理恵の声「確かに」
クミの声「むしろ私、焼肉の方がいいです」

赤羽「……」

×　×　×

フラッシュバック。

澄玲のインスタの、「今月画材買い過ぎてお金がない」というメッセージ。

×　×　×

ドアの前に立っている赤羽。

ドアが開き、理恵とクミが出てくる。

理恵「（笑顔で）ああ赤羽くん、いたんだ」

赤羽「……あ、はい」

理恵「これから休憩？　ごゆっくり」

クミ「休憩いってらっしゃい」

赤羽「……いってきます」

理恵とクミが去って行く。

赤羽「……」

24○　川沿いの道（夕）

自転車でゆっくり走る赤羽。

並走して走る澄玲。

赤羽「ＰＯＰの絵、本当上手いと思いました」

澄玲「絵を描くのが好きなだけです」
赤羽「でもなんていうか、プロみたいな絵だ
なって……」
澄玲「そうでもないですよ、あれくらいの絵、
誰でも描けます」
赤羽「僕には描けません」
澄玲「それより赤羽さん、家で焙煎するほど
珈琲好きなのに、ちゃんとした珈琲の専門
店とかで働きたいって思わないんですか」
赤羽「まったく思わないです」
澄玲「どうしてですか」
赤羽「珈琲焙煎は趣味ですから」
澄玲「好きな事は仕事にしたくないってやつ
ですか」
赤羽「その通りです」
別れ道の小さな橋につく。
澄玲「はい、「帰り道たまたま会ったバイトの
同僚との挨拶程度の会話」終了です、お疲
れ様です」
赤羽「あの……」

澄玲「はい」
赤羽「……僕、やっぱり明日のバイトの飲み会行こうかなと思って」
澄玲「（驚き）えっ」
赤羽「べつにお酒飲む事じたいは嫌いじゃないので……」
澄玲「……赤羽さん、無理してませんか？」
赤羽「いいえ、べつに」
澄玲「そうですか、……嬉しいです」
赤羽「はい……」
澄玲「みんなも喜ぶと思いますよ、明日の早番のバイト終わりに、出勤メンバーは直で居酒屋向かう事になってるそうです」
赤羽「僕は明日バイト休みなので、飲み会から参加します」
澄玲「それでしたら後で詳細連絡しますね、……あ、ライン教えてもらっていいですか」
赤羽「（困惑し）あ、ああ……」
澄玲「……もしかして、バイト先の人にライン教えたくない主義ですか」

赤羽「……ええ、まあ、そうです」
澄玲「……そうですか、困りましたね、こんな飲み会の詳細を連絡するごときで、赤羽さんの主義崩壊させたくないですよ私」
赤羽「……仕方ないんで、いいですよ、ライン教えますよ」
澄玲「いやいや、今冗談言ってる場合じゃないですよ」
赤羽「……あの冗談じゃなくて、本当にいいですよ、ライン教えるくらい」
澄玲「本当ですか、……本当にいいんですか」
赤羽「志田さん、赤羽イズムを尊重し過ぎですよ、志田さんに教えるだけなら、べつに何の害もなさそうですし」
澄玲「えっ……、なんか信頼されてるみたいで嬉しいです」
澄玲、スマホを出す。
赤羽と澄玲、ラインを交換する。
澄玲「……それでは後で連絡します、お疲れ様です」

赤羽「はい、お疲れ様です」

澄玲、走り去って行く。

赤羽「……」

25○　赤羽のアパート・リビング（夜）

赤羽、ハンドピック作業をしている。

赤羽の耳に、若い男女達の声が聞こえてくる。

男Aの声「まじでアイツ調子乗ってるよな、自分の事、頭いいと思ってんじゃないの」

男Bの声「本当だよね、ねえ赤羽もあいつのことムカつくだろ、……なんか言えよ」

女Aの声「赤羽くん人の悪口全然言わないね」

女Bの声「いい人なんだよ赤羽さんは」

男Cの声「ただのつまんない奴なだけだろ」

赤羽、耳を塞ぐ。

それでも、声はやまない。

赤羽「……」

スマホの着信音が鳴る。

同時に声が止む。

赤羽、スマホをとる。
澄玲からのラインで、明日の飲み会の
詳細が送られてきていた。
赤羽「……」

26○　川沿いの道（翌日・夕）
赤羽、歩いている。
緊張の面持ち。
急に立ち止まり、
赤羽「（呼吸が乱れ）……」

27○　駅前のチェーン店の居酒屋・外（夕）
入り口付近で立ちすくんでいる赤羽。
大学生の男女達が入口から出てくる。
かなり酔っていて騒がしい。
赤羽「（大学生達を見て）……」
赤羽、耳を塞ぎ、その場に座り込む。

28○　同・店内
テーブル席で飲んでいる理恵、クミ、

久保、ほか二十代のバイト達。
その中に澄玲もいる。
赤羽はいない。
澄玲、スマホを見ると、赤羽からラインが来ていた。
「すみません、やっぱり行けません」
というメッセージ。
澄玲「……」

29○　街中（夜）
赤羽、ひとりトボトボ歩いている。
赤羽「……」

30○　赤羽のアパート・リビング（夜）
床に仰向けになっている赤羽。
スマホの着信音。
赤羽、スマホをとる。
澄玲からのライン。
「30 分後くらいに橋の前に着きます
来れるようでしたら来てください」と

いうメッセージ。

赤羽「……」

31○　橋の前（夜）

赤羽が立っている。

澄玲がやってくる。

澄玲「……ふふっ、赤羽さん、本当に飲み会嫌いなんですね」

赤羽「……僕、人の悪口言えないんですよね」

澄玲「はい？」

赤羽「ほら、飲み会ってそこにいない人の悪口言うのが、メインディッシュになることほとんどじゃないですか」

澄玲「……ああ、確かにそうですね、私達世代の女同士の飲み会のメインディッシュは「人の悪口」か「恋愛の話」ですから」

赤羽「だから飲み会嫌いなんです……」

澄玲「そうだったんですね」

赤羽「「それだけかよ」って思ってますよね」

澄玲「思ってません」

赤羽「……本当ですか」
澄玲「はい、でも、この世界には、赤羽さんが思うような悪い飲み会だけじゃなくて、いい飲み会だって存在しますよ」
赤羽「今日の飲み会は、いい飲み会でした？」
澄玲「「人の悪口」と「恋愛の話」がメインディッシュでした」
赤羽「行かなくてよかったです……」
澄玲「……なんか、落ち込んでます？」
赤羽「……はい、やらかしてしまったので」
澄玲「え……」
赤羽「一線を越えてしまいました」
澄玲「……なんの一線ですか」
赤羽「バイト先の人達に飲み会に行くって言って、当日ドタキャンしてしまう事を、一線を越えた事と言います」
澄玲「……」
赤羽「……もう今のバイト先ではやっていけません」
澄玲「あの、赤羽さん、じつは……」

赤羽「（聞いてない）もう明日バイト飛ぶしかないです」
澄玲「（大声で）言ってないんです」
赤羽「えっ……」
澄玲「……じつは、赤羽さんが飲み会に来るって事、みんなに言ってなかったんです」
赤羽「……」
澄玲「だから赤羽さんは飲み会に来なくても何も問題ないんです」
赤羽「どうして、そんな事……」
澄玲「……私、もしかしたら赤羽さん無理してるかもって思ってて、……それでリスク回避のために、言わないでおいたんです」
赤羽「……そうだったんですか」
澄玲「……べつに来ないって決めつけてたわけじゃないですよ、来たら来たでサプライズみたいになっていいなと思ってて」
赤羽「……なんか、ありがとうございます」
澄玲「いえいえ、お礼を言われるアレじゃないので」

赤羽「……いや、でもどっちにしろ、僕が踏み外した行動をした事にはかわりないです」
澄玲「どういう事ですか」
赤羽「志田さんの前で、しっかり踏み外してしまったので」
澄玲「べつに私の前だけならいいじゃないですか」
赤羽「えっ……」
澄玲「私の前ではいくらでも踏み外してください、……私は赤羽さんの事笑いませんし」
赤羽「……」
澄玲「「帰り道たまたま会ったバイトの同僚との挨拶程度の会話をする仲」じゃないですか」
赤羽「「帰り道たまたま会ったバイトの同僚との挨拶程度の会話をする仲」ってそんなに強固な関係なんですか？」
澄玲「はい、強固です」
赤羽「……」
澄玲「そういう事なので、また明日、バイト

先で会いましょう」

赤羽「……はい」

澄玲「それでは、お疲れ様です」

澄玲、去って行く。

赤羽「……志田さん」

澄玲、振り返って、

澄玲「はい」

赤羽「……本当に、ありがとうございます」

澄玲「いいえ全然、では」

赤羽、去って行く澄玲の背中を見つめ、

赤羽「……」

32○　赤羽のアパート・リビング（夜）

赤羽、テーブルの上のプラスチックケースを手に取って、フタを開ける。

中に入った欠点豆を見つめる。

赤羽「……」

33○　「オールウェイズ」・バックヤード（翌日）

赤羽と進藤がエプロンをつけている。
そこに出勤してきた久保が来て、
久保「おはよっす、赤羽さんも昨日飲み会来ればよかったのに、超楽しかったですよ」
進藤「飲み会？　俺は聞いてないぞ」
赤羽「今度行ける時に行きます」
久保「赤羽さんいつもそうやって切り抜けるからな」
赤羽「……」
進藤「いいな、俺も今度飲み会行きたいな」
休憩室の中から理恵とクミの声が聞こえてくる。
クミの声「ヤーキニク、ヤーキニク」
理恵の声「クミ、それ志田さんに強制しちゃダメだよ、それとなくほのめかして、奢ってもらおう」
赤羽「……」
澄玲が出勤してくる。
澄玲「（赤羽に）おはようございます」
赤羽「おはようございます……」

34○　同・休憩室

テーブルで向かい合い座る赤羽と澄玲。

赤羽、二万円を澄玲に差し出す。

澄玲「なんですかこれ」

赤羽「焼肉代です」

澄玲「えっ……」

赤羽「僕が飲み会来なかったから、志田さん新山さん達に焼肉奢るんですよね」

澄玲「……どうして知ってるんですか」

赤羽「この前、ここであの人達がそう話してるのを聞いてしまって」

澄玲「……だから、飲み会に来てくれるって言ってくれたんですか」

赤羽「……べつにそういうわけじゃないです、このお金受け取ってください」

澄玲「受け取れません」

赤羽「僕のせいなんで、僕が行くって言って、行かなかったから」

澄玲「絶対、赤羽さんのせいではないです、

それに全然大丈夫です」
赤羽「なにが大丈夫なんですか」
澄玲「私にだって、焼肉奢るのを断ることくらい出来ますよ」
赤羽「……」
澄玲「ちゃんと断れます、ピリつかせずに、冗談っぽい空気にしながら、やんわり断ること出来ます」
赤羽「……志田さんレベル高いですね、尊敬します」
澄玲「そんな事で敬わないでください」
赤羽「……（時計を見て）僕、もう休憩時間終わりなんで、先、戻ります」
澄玲「はい」
赤羽、手元に置いていたリュックから水筒を出し、
赤羽「あの、これ……」
澄玲「なんですかこれ」
赤羽「自家焙煎した豆で作った珈琲です」
澄玲「……いや、でも受け取れないです」

赤羽「えっ」

澄玲「受け取っちゃったら、距離が縮まってしまうので」

赤羽「……」

澄玲、水筒を受け取って、

澄玲「冗談です、美味しくいただきます」

赤羽「（ほっとして）……それでは」

赤羽、休憩室から出ていく。

澄玲、水筒を大事そうに持つ。

水筒を開け、カップに注ぐ。

匂いをかぐ。

澄玲「……ん？」

ひと口飲んでみる。

澄玲「……にっが」

35○　川沿いの道（夕）

赤羽、自転車に跨りながら歩いている。

横を歩く澄玲。

澄玲「やっぱりあれ、欠点豆で作った珈琲だったんですね」

赤羽「はい、志田さんが飲みたいって言ってたので、さすがにカビが生えた豆とかは取り除きましたけど、味、どうでしたか」
澄玲「ずばり苦かったです」
赤羽「だから言ったじゃないですか」
澄玲「まるで赤羽さんの人生の苦悩が詰まったような味でした」
赤羽「なんですかその表現、僕が欠点だらけの人生って事ですか？」
澄玲「すみません、赤羽さんの人生何も知らないのに、分かったような事言ってしまい」
赤羽「いいえ、今度はちゃんとした珈琲豆で作ります」
澄玲「本当ですか、それなら私、赤羽さんの家行って、出来たての珈琲飲みたいです」
赤羽「えっ……」
澄玲「あ、すみません調子乗りました、家に行くのはダメですよね」
赤羽「……まあ、……べつに」
澄玲「（聞いてない）何かお礼をしたいです」

赤羽「あ、だったら、絵を描いてほしいです」

澄玲「絵？」

赤羽「志田さんがこの前ＰＯＰに描いたイラスト、すごくいいなと思ったので」

澄玲「そうですか……」

赤羽「……すみません、調子乗りました、欠点豆の珈琲と志田さんの絵は全然価値が違いました、忘れてください」

澄玲「はい……」

別れ道の橋につく。

赤羽「それでは」

赤羽、自転車を走らせ、去って行く。

澄玲「……」

36○　赤羽のアパート・リビング（夜）

赤羽、スマホで「濁斗」のインスタを見ている。

「濁斗」の最新の投稿で、「明日、玉野美大ＯＢ展で作品を展示するので是非起こしください」というメッセージ。

赤羽「……明日？」

赤羽、スマホで、バイト先のシフト表を見る。澄玲は明日休みである。

赤羽「……やっぱり志田さんだ」

37○　雑居ビル・外（翌日・夕）

個展の看板が置かれている。

「玉野美大 OB 展」。

38○　同・レンタルギャラリー・ロビー

受付で入場料を払う赤羽。

澄玲の声が聞こえる。

赤羽、声の方を振り向くと、ロビーで澄玲が同級生らしき人達と話していた。

これまで見た事がない、澄玲の自然に笑う表情。

赤羽「……」

赤羽、逃げるように会場に入っていく。

39○　同・ギャラリー内

絵画や写真や彫刻、オブジェ等の斬新で独創的な作品が展示されている。
赤羽、作者の名前を確認しながら、作品を見ていく。
「濁斗」の名前が見つかる。
作品名は「珈琲星人」とある。
赤羽「……」
赤羽、視線を上げる。
大きな紙に描かれた男の顔の絵。
男の、目と口と鼻と耳が珈琲豆で出来ている。
顔の造形と雰囲気から、明らかに赤羽をモデルにしている事がわかる。
顔の所々が虫に食われている。
赤羽「……」
赤羽、呆然とした顔で絵を見ている。
ふと、その絵の横を見ると、それも濁斗の作品で、「コミュニケーション」というタイトルの絵がある。
それは、「オールウェイズ」のバイトの

理恵やクミや久保らをモデルにしたであろう人物達がカフェ店内でそれぞれ会話をしていて、各々の人物の口や目からナイフが飛び出し、話し相手の身体に突き刺さっている、という絵だ。

赤羽「（驚愕）……」

澄玲の声「赤羽さん？」

赤羽、振り向くと、澄玲が立っている。

赤羽「……志田さん」

澄玲「なんで、ここにいるんですか……」

赤羽「……」

澄玲「……もしかして……知ってたんですか」

赤羽「……」

赤羽は、何も答えず、走り去って行く。

澄玲、追いかけようとするが、立ち止まる。

振り返り、「珈琲星人」の絵を見る。

澄玲「……」

40○　赤羽のアパート・リビング（夕）

赤羽、帰宅してくる。
テーブルの上に置かれた、プラスチックケースを取り、フタを開ける。
中に入った欠点豆を見つめる。
赤羽、床にプラスチックケースをなげつける。
床に散らばる欠点豆。

赤羽「……」

赤羽、自分の頬を叩く。

41○　「オールウェイズ」・店内（翌日）
カウンターに立つ赤羽と澄玲。

澄玲「赤羽さん」

赤羽、無視して、何も答えない。

澄玲「……」

42○　同・外（夕）
従業員口から出てくる赤羽。
駐輪スペースの前に澄玲が立っている。

澄玲「赤羽さん、話が……」

赤羽、澄玲の横を通り過ぎ、自転車に乗って、去って行く。

澄玲「……」

43○　川沿いの道（夕）

自転車で走る赤羽。

赤羽「……」

44○　赤羽のアパート・キッチン（日替わり）

赤羽、珈琲豆を焙煎している。

鍋の中から聞こえる珈琲豆がパチパチとハゼる音に耳を澄ませる。

テーブルの上のプラスチックケースには欠点豆が戻されている。

45○　「オールウェイズ」・外観（日替わり）

「ガシャン」という音。

46○　同・店内

赤羽、箒と塵取りで床に散らばったコ

ーヒーカップの破片を片付けている。
赤羽、テーブルの下に落ちた、カップの破片を手で取ろうとする。

赤羽「いたっ」

赤羽、指を見ると、血が出ている。
カウンターから赤羽を見ている澄玲。

47○　同・キッチン

シンクで手を洗う赤羽。
澄玲が来て、赤羽にコンビニのレジ袋を差し出す。

赤羽「なんですか……」

澄玲「……この前消毒してくれたお返しです」

赤羽、レジ袋を受け取る。
澄玲、去って行く。
赤羽、レジ袋の中を見ると、消毒液と絆創膏が入っている。

赤羽「……」

48○　川沿いの道（夕）

赤羽、ひとり自転車で走っている。

赤羽「（人の気配を感じ）志田さん？」

と、振り向く。

そこには全然知らない、ランニング中のおじいちゃんがいた。

赤羽「……すみません、人違いでした」

おじいちゃん、走って通り過ぎていく。

赤羽「（手の指の絆創膏を見つめ）……」

何かを決意して、来た道を戻っていく。

49○　街中（夕）

赤羽、周囲を見回しながら走っていく。

歩道を歩く澄玲を見つける。

赤羽、澄玲の前で自転車をとめる。

澄玲、立ち止まる。

澄玲「……なんですか」

赤羽「なんでいつもと違うルートで帰ってるんですか」

澄玲「元々こっちのルートで帰ってたので……どいてください」

赤羽「どきません」

澄玲、一瞬にして狂気の形相になり、

赤羽に思いっきりタックルする。

自転車ごと倒れる赤羽。

赤羽「（驚き）えっ、なになになに」

澄玲、赤羽を助け起こしながら、

澄玲「すみません、感情がスパークしてしまいました、怪我はなかったですか」

赤羽「……だ、大丈夫です」

赤羽、自転車を起こし、立ち上がる。

赤羽「……ビックリしました、志田さんがこんな事するなんて」

澄玲「すみません、本当に怪我ないですか」

赤羽「はい、もしあっても、今、消毒液と絆創膏持ってるので大丈夫です」

澄玲「……どうして私のこと探して追ってきたんですか、避けてるんじゃないんですか」

赤羽「志田さんと、しっかり話さなきゃと思って」

澄玲「……そうですか、私も弁明というか、

直接赤羽さんに言いたい事あったので」
赤羽「なんですか」
澄玲「あの個展で展示してた絵の事です」
赤羽「……ああ、僕の事バカにした絵ですか」
澄玲「……別にあの絵に、悪意があったわけ
ではないんです」
赤羽「本当ですかね」
澄玲「私、絵を描く時って、自分の中に浮か
んだものを、そのまま抑制することなく、
衝動にまかせて描いてるんです、頭で考え
ないで、心と手で描いてるっていうか」
赤羽「天才肌なんですね」
澄玲「描いてみてわかるんです、自分ってこ
んな事考えてるのかもって、描かれた絵を
見て自分で驚く事もしょっちゅうです、よ
く狂気じみた絵を描いてしまうので……」
赤羽「……」
澄玲「私の中で、よく、抑えきれない感情の
爆発が起きるんです」
赤羽「……さっきみたいな」

澄玲「……はい、それで感情が爆発した時はランニングをして、溢れ出す感情を発散したり、気持ちの整理をしたりするんです」
赤羽「そうだったんですね……」
澄玲「本名の「志田澄玲」として関わってる身近な人には自分が描いた絵を見られたくなくて、「濁斗」って名前で活動することにしたんです、……バイト先の人達にも、……赤羽さんにも言えませんでした」
赤羽「……」
澄玲「私の絵で、変な誤解を与えてしまったなら、ごめんなさい」
赤羽「悪意がなかった事はよくわかりました」
澄玲「……ありがとうございます」
赤羽「……僕が志田さんを避けるようになった原因は、あの絵だけではないんです」
澄玲「え……」
赤羽「僕はバイト先以外の志田さんの一面を見て、疎外感を抱いてしまったんです」
澄玲「……疎外感？」

赤羽「僕、志田さんの事、勝手に自分と同じ
側の人だと思ってました」
澄玲「……」
赤羽「……誰とも波長を合わす事が出来ない
僕と違って、志田さんは誰とでも波長を合
わす事が出来る人だって気付いたんです」
澄玲「……」
赤羽「バイト先の人達とも、美大のOBの人
達とも、どんな人にも擬態して交信できる
人なんです」
澄玲「……」
赤羽「だから、こんな「珈琲星人」の僕にも
擬態して、交信することができたんです」
澄玲「……違います」
赤羽「えっ……」
澄玲「私は別に擬態してるつもりはないです」
赤羽「……」
澄玲「赤羽さんといるとき、べつに、チュー
ニングとかしてませんし、なんなら本来の
自分に近い状態にいる感じというか……」

赤羽「……」

澄玲「バイトからの帰り道は、今いるこっちの方が近道なんですけど、……私は赤羽さんと一緒に帰る川沿いの道の方が好きです」

赤羽「……」

澄玲「それは紛れもない事実です」

赤羽、険しい表情をする。

澄玲「……どうしたんですか」

赤羽「嬉しいんです」

澄玲「（吹き出し）ふっ」

赤羽「それでしたら、「帰り道たまたま会ったバイトの同僚との挨拶程度の会話をする仲」再開しましょう」

澄玲「……どうしようかな」

赤羽「そこはもったいぶるんですか」

澄玲「しょうがないですね、再開しましょう」

赤羽「……よかったです」

50○　「オールウェイズ」・店内（日替わり）

カウンターに立つ赤羽と澄玲。

澄玲、カウンターに置かれたメモ用紙に、「報告したい事があります」と書く。

赤羽、「なんですか」と書く。

澄玲、「帰り道で」と書く。

赤羽、頷く。

51○　川沿いの道（夕）

赤羽、自転車を押しながら歩く。

横を歩く澄玲。

澄玲「私、アートのコンクールで入選したんです」

赤羽「本当ですか、おめでとうございます」

澄玲「ありがとうございます」

赤羽「もしかして「珈琲星人」の絵ですか」

澄玲「違います」

赤羽「（少し残念）違うんですか……」

澄玲、赤羽にスマホを見せ、

澄玲「この絵です」

スマホ画面に映る絵、タイトルは「母」。

中年女性の腹部が檻になっていて、そ

の檻の中にいる小人の少女がマシンガンをぶっ放し、中年女性の身体から血が飛び散っている絵。

赤羽「これまたユニークかつ過激な絵ですね」

澄玲「誉め言葉として受けとります」

赤羽「すごいですね、賞金とか出るんですか」

澄玲「はい、佳作なので五万だけですけど」

赤羽「五万でもすごいですよ、作品に対してお金が支払われるなんて、なんかどんどん夢に近づいていってますね」

澄玲「はい、三十までにものにならなかったら、きっぱり諦めて、就職しようと思ってたので、なんか希望が持てました」

赤羽「意外としっかり考えてるんですね」

澄玲「意外は失礼です」

赤羽「すみません、口がすべりました」

澄玲「赤羽さんは、この先、就職とか考えてるんですか」

赤羽「僕は大学卒業して、会社勤めてましたけど、身体壊して一年で辞めました」

澄玲「へえ」
赤羽「死ぬまでフリーターでいようと思ってます」
澄玲「私がアーティストとして成功したら、赤羽さん私と結婚しますか？」
赤羽「なんですかいきなり、……ふっ、志田さんまた冗談ですか」
澄玲「いやいや冗談じゃなくて、お互い一人でいるより、誰かと一緒になった方が、歳とって病気になった時とか、いろいろ都合がいいかなって」
赤羽「本気ですか……」
澄玲「……あっ、すみません、話が飛躍し過ぎましたね、賞とってハイになってました」
赤羽「そのようですね……」
澄玲「……私、べつに恋愛結婚がすべてじゃないと思ってる方なんですけど、赤羽さんが同じ考えとは限らないですもんね」
赤羽「……ああ、僕のこと男性として好きとかではないんですね」

澄玲「はい、そういう好きとかではないです、すみません」
赤羽「結構はっきり言うんですね」
澄玲「あ、傷つきました？　もしかして赤羽さん私のこと……」
赤羽「いえいえ、僕も志田さんのこと、そういう好きではないんで」
澄玲「そうなんですか、……あ、なんか安心しました」
赤羽「僕も安心です」
澄玲「なんか変な感じになっちゃったので、もう今の話はなかったことにしましょう、離婚しましょう」
赤羽「えっ、そもそも僕、結婚したつもりはなかったです」
別れ道につく。
澄玲「人生生きてれば、コンクールで入選する事や、バイトの帰り道に、結婚して離婚する事もあるんですね」
赤羽「結婚と離婚はしてません」

自然な表情で笑い合う赤羽と澄玲。

52○　「オールウェイズ」・店内（日替わり）

カウンターに立つ澄玲と理恵。

女性客が入ってくる。

澄玲「いらっしゃいませ……」

澄玲、女性客、志田裕子（50）を見て、

表情が凍りつく。

澄玲「……お母さん」

理恵「お母さん？」

裕子の顔、濁斗のコンクールの受賞作

「母」の絵の女性と同じ顔である。

ホールで店内清掃していた赤羽、澄玲

の異変に気付く。

赤羽「……」

裕子「あんた、なにこれ」

裕子、スマホを出し、澄玲に見せる。

スマホには、濁斗のインスタ画面。

アップしていた濁斗の「母」の絵。

澄玲「……」

理恵、スマホ画面をのぞき込み、

理恵「えっ、この絵、志田さんが描いたの、なにこの名前、だく……？　志田さんのペンネーム？」

澄玲「……（裕子に）なんで知ってるの？」

裕子「あんたの同級生の舞ちゃんに聞いたの、あんたが変な絵を描いて、賞とったって」

澄玲「……」

裕子「親不孝者」

澄玲「……そんな事言いに、わざわざ東京まで来たの」

赤羽「……」

裕子「……話があって来たの」

澄玲「……今バイト中だから」

裕子「あんたの家で待ってるから」

澄玲「……」

裕子、店を出ていく。

澄玲「……」

恵理「……うわーなんかバチバチだったね、志田さんの恐い顔はじめて見た」

澄玲「……（笑顔を作って）ごめんなさい」
赤羽「（澄玲を見て）……」

53○　同・休憩室

テーブルで向き合い座る赤羽と澄玲。
澄玲「……私、母親の前で擬態できてなかったですよね」
赤羽「……」
澄玲「……私、母親と波長合わなくて」
赤羽「……」
澄玲「変なところ見られてしまいました」
赤羽「……志田さんの事、どんな人にも擬態できるとか言ってすみません」
澄玲「謝らないでください」
赤羽「はい、すみません……」

それ以上会話が続かない。

54○　同・店内（夕）

ホールで清掃している澄玲。
カウンターに立つ、理恵とクミ、澄玲

を見ながらコソコソ話している。

澄玲「……」

55○　同・バックヤード（夕）

澄玲、入ってくる。

壁に、濁斗の「コミュニケーション」の絵をプリントアウトしたものが貼られている。

絵の上から、「天才　志田澄玲画伯の絵」とマジックペンで書かれている。

澄玲「……」

澄玲、すぐに絵を剥す。

56○　川沿いの道（夕）

自転車を押して歩く赤羽。

横を歩く澄玲、落ち込んでいる様子。

赤羽「……家で、お母さんとうまく話せるといいですね」

澄玲「……家に着きたくないです」

赤羽、立ち止まる。

澄玲「どうしたんですか」
赤羽、自転車を押しながら、スローモーションのように歩きはじめる。
赤羽「このくらいのゆっくりなペースでいいですかね？」
澄玲「……（笑い）ふっ、もう少し速くてもいいと思います」
赤羽「わかりました、（少し速くなって）このくらいですか」
澄玲「はい、そのくらいでお願いします」
ゆっくり歩いていく二人。

57○　「オールウェイズ」・店内（日替わり）
カウンターに立つ赤羽と久保。
久保「志田さん、今日で三日連続休みですよ」
赤羽「……そうですね」
久保「なんかあったんすかね、だってあの日から来なくなったんですよ」
赤羽「……」
久保「赤羽さん、なにか知らないんですか、

志田さんの事」

赤羽「……何も知りません」

久保「本当ですか、赤羽さん結構志田さんと仲よかったでしょ、俺気付いてましたよ」

赤羽「……」

久保「このままフェードアウトしちゃうのかな、俺結構志田さんタイプだったんだけどな、あの絵にはさすがに引きましたけど」

赤羽「……」

58○　赤羽のアパート・リビング（日替わり・朝）

赤羽、スマホを見ている。

インスタで「濁斗」を検索しても、見つからず、表示されない。

赤羽「……」

ラインで、澄玲に何かメッセージを送ろうとするが、言葉が見つからない。

ふと、窓の外を見る。

雨が降っている。

ランニング用レインウェアを着た澄玲
が走って通り過ぎていくのが見える。
赤羽「……」

59○　「オールウェイズ」・バックヤード
エプロンを着けている赤羽。
澄玲が入ってくる。暗い表情である。
赤羽「……志田さん、おはようございます」
澄玲「おはようございます、すみません長い
間休みを取ってしまって」
赤羽「いいえ全然、……大丈夫ですか？」
澄玲「（笑顔で）はい、全然大丈夫です」
と、会話を切り上げ、赤羽の横を通り
過ぎて行く。
赤羽「……」

60○　同・休憩室の前
を通りかかる赤羽。
澄玲が店長（男・43）と面接している
のが見える。

赤羽「……」

61○　同・外（夕）

澄玲、従業員口から出てくる。

駐輪スペースで赤羽が待っている。

澄玲「……」

赤羽「今日一緒に帰りましょう」

澄玲「……」

赤羽「「たまたま」じゃなくて、ちゃんと一緒に帰りましょう」

澄玲「……」

62○　川沿いの道（夕）

自転車を押して歩く赤羽。

横を歩く澄玲。

黙ったままの二人。

赤羽「……すみません、自分で一緒に帰ろうと言いながら、僕にリードする力がなくて」

澄玲「こちらもすみません、私、なんか重たい空気作っちゃってますよね」

赤羽「いえいえ……」
澄玲「……もう私は誰にも波長を合わせられなくなっちゃいました」
赤羽「……」
澄玲「……赤羽さんと一緒ですね」
赤羽「……」
澄玲「……私も珈琲星人になります」
赤羽「……ならなくていいです、僕とキャラが被ってしまうので」
澄玲「……」
赤羽、自転車をとめ、
赤羽「……あの、二人乗りしませんか」
澄玲「えっ……」
赤羽「……いきなりすみません、なんか二人乗りしたら気分が晴れるかなと思って」
澄玲「でも、違法性が……」
赤羽「……そうですよね、仮に二人乗りして気分が晴れても、「でも軽犯罪してるしな」ってなって、モヤっとしてしまいますよね」
澄玲「はい、おそらくそうなります」

赤羽「それでは、今のはナシで」

澄玲、自転車の荷台を掴む。

澄玲「これで、二人乗りってことで」

赤羽「……はい、これならモヤモヤしません、気分が晴れるかは分かりませんけど」

澄玲「……」

赤羽「……志田さん」

澄玲「はい」

赤羽「この後、家来ませんか？」

澄玲「……」

63○　赤羽のアパート・キッチン（夕）

赤羽、手動の珈琲ミルで豆を挽く。

澄玲は座って、赤羽の作業を見ている。

赤羽、フィルターをはめたドリッパーをサーバーにのせる。

フィルターに挽いた珈琲豆を入れる。

そこにお湯を注いでいく。

蒸らしてから、再度お湯を注いでいく。

赤羽の真剣な表情。

澄玲「（赤羽の顔を見つめ）……」

×　×　×

テーブルに向かい合い座る赤羽と澄玲。

二人の前にはマグカップ。

澄玲、珈琲の匂いをかぐ。

澄玲「……いい匂いです」

赤羽「どうぞ」

澄玲、一口飲む。

赤羽「……」

澄玲「（ゆっくり味わい）……うん、いい苦みです、雑味がなくて、……美味しいです」

赤羽「よかったです、今回はちゃんとした珈琲豆を使いましたから」

澄玲「欠点豆を取り除いた珈琲なんですね」

赤羽「はい」

澄玲「この前の欠点豆の珈琲と全然違います、……やっぱり、こっちの方がいいですね」

赤羽「……」

澄玲「……今日、私、バイト辞めるって店長に言ってきました」

赤羽「……どうしてですか」
澄玲「……実家に帰ることになったんです」
赤羽「……」
澄玲「……父親の脳梗塞が再発してしまって、後遺症が残ってしまい、介護が必要になるんです」
赤羽「……大変だったんですね」
澄玲「保険で介護サービスも受けられるんですけど、それでも心配ですし、母親には、フリーターであんな絵描いてるんだったら介護の手伝いをしなさいって言われて……」
赤羽「……」
澄玲「……そんな母親に対して、何も言い返せなかったです」
赤羽「……」
澄玲「……父親の事は好きなので、嫌々実家に帰るわけではないんです、……どうしようも出来ないところもあるので」
赤羽「……絵はどうするんですか」
澄玲「……」

赤羽「……僕は、続けてほしいです」
澄玲「……それぱっかりは、私の頭が決める事じゃなくて、心と手が決める事なので」
赤羽「……そうですよね、すみません、踏み込んだ話をしてしまって」
澄玲「……いいえ、嬉しいです」
澄玲、テーブルの上のプラスチックケースを見て、
澄玲「それ、欠点豆ですよね」
赤羽「はい」
澄玲「そういえば、なんでケースに入れて取ってあるんですか、捨てるんですよね」
赤羽「すぐに捨ててしまうのは申し訳なくて」
澄玲「……」
赤羽「こうして一緒に過ごして、しっかりと欠点豆達への謝罪が終わってから、捨てるようにしてるんです」
澄玲「謝罪？」
赤羽、ケースを自分の前に持ってきて、
赤羽「ごめんなさい……」

と、ケースの上にうつ伏せになる。

澄玲「……」

赤羽「……美味しい珈琲を飲むために、取り除いてしまって、ごめんなさい」

澄玲「……」

赤羽「（顔を伏せたまま）……落ち込んだ志田さんを元気づける事出来なくて……、何も言えなくて、……ごめんなさい」

澄玲「……」

赤羽「……志田さんに何もしてあげられなくて、ごめんなさい」

澄玲「……」

赤羽「……ポンコツでごめんなさい」

澄玲「……」

赤羽「……欠点豆なのは僕の方です」

澄玲「……顔を上げてください」

赤羽「……」

澄玲「上げてください」

赤羽、顔を上げる。

赤羽の目から涙が流れている。

澄玲「……赤羽さんは、私にとって、美味しい珈琲ですよ」
赤羽「……」
澄玲「たくさん楽しさをくれました」
赤羽「……」
澄玲「最高の珈琲星人です」
赤羽「……誉め言葉として受け取ります」
澄玲「受け取ってください」
赤羽「（笑い）ふふっ」
澄玲、珈琲を飲む。
澄玲「……うん、本当に美味しい」
赤羽「（一口飲み）……はい、今日のはとくに美味しくできました」
澄玲「あっ、今飲み会してるみたいじゃないですか」
赤羽「えっ」
澄玲、マグカップをかかげ、
澄玲「ほら、一緒に飲んでます」
赤羽「二人だけだし、珈琲を一緒に飲むことを飲み会とは言わないと思います」

澄玲「大きな意味では飲み会ですよ」
赤羽「まあ、そういう事にしましょう」
澄玲「じゃあ乾杯で」
赤羽「……はい」
乾杯する二人、笑い合う。

64○　「オールウェイズ」・外観（日替わり）
テロップ「三カ月後」

65○　同・店内
カウンターに立つ理恵とクミ。
クミ「店内で、カフェラテホットMサイズ」
珈琲マシンの前に立つ赤羽。
赤羽「はい」
赤羽、カフェラテのミルクを丁寧に泡立たせていく。
進藤、赤羽からカフェラテを受け取り、
進藤「今日も最高のスチーミングだね」
赤羽「（少し満足げ）いいえ、べつに全然です」

66○　同・外

駐輪スペースで、自転車に跨る赤羽。

久保が来て、

久保「赤羽さん、今日の飲み会来ませんか」

赤羽「行きません、……でも、いつかきっと」

赤羽、自転車で去って行く。

67○　川沿いの道（夕）

赤羽、ひとり自転車で走っている。

ふと、自転車をとめる。

赤羽「（道を見つめ）……」

着信音が鳴り、スマホを見る。

澄玲からのラインである。

「新作描けました」というメッセージと「手の平にペンで描かれた、珈琲豆の形をした頭の赤羽の似顔絵」の画像。

赤羽「（吹き出し）ふっ」

赤羽の顔がほころぶ。

赤羽、ペダルを踏み、前に進む。

（了）